

戦国期山陰吉川領の成立と構造

舘 鼻 誠

はじめに

戦国期、とりわけ元亀から天正年間にかけての毛利領国の構造は、①本領の安芸を中心に、②本宗家―山口奉行によって推進される防長（旧大内領国）、③元就の次男で安芸国衆の吉川家を相続した元春によって推進される山陰（旧尼子領国）、④その弟で同じく安芸国衆の小早川家を相続した隆景によって推進される瀬戸内・山陽支配の四地域に大別できる。このうち吉川・小早川は、元就在生中より、兄隆元、隆元早世後（永祿六年）は、その子輝元を補佐し、毛利の両川と呼ばれた。とりわけ隆元死去後は元就文書に加判し、同九年以降は、毛利家を代表する形で連署状も発給し始める。⁽¹⁾更に輝元初政の永祿末年から元亀元年には、元就の指導のもとに、毛利家譜代家臣の筆頭の地位にあった福原貞俊、ならびに福原に次ぐ口羽（志道）通良とともに

毛利権力の中樞部を構成し、政策決定にも深く関与してゆく。かかる領国支配の構造を、河合正治氏は「毛利両川体制」と規定したが、⁽²⁾防長支配の研究が進展するなかにおいて、「両川」の担った地域支配の実体や本宗支配との関わりについての具体的な分析は乏しく、とりわけ吉川元春が担ったとされる山陰支配に関しては、これまでほとんど論及されてはこなかった。そのうえ国衆の自律性を重視するあまり、支配の限界を指摘する傾向が強く、毛利領国のなかでも支配の遅れた地域としてのイメージをぬぐいきれない。⁽³⁾しかし尼子領国を継承した山陰には、大内領国を継承し官僚機構を整備した防長とは異なる、山陰なりの支配の特質があったのではないか。かかる視点から本稿では、吉川によって支配が推進される旧尼子領国を山陰「吉川領」と呼び、吉川領の位置・役割を毛利領国の拡大・元就死去といった領国支配の段階的变化に即しながら検討すること

で、毛利領国下における山陰支配の構造をあきらかにしてゆきたい。⁽⁴⁾

註

- (1) 元就・元春・隆景の連署状は、永祿六年九月より現れ（閏三・四八七—）、翌七年（輝元元服の前年）まで五点を確認できる。いずれも目下には元就が署名し、九年以降は、元春・隆景の連署状も現れることからすると、この処置は、隆元の急死により、毛利家の権力を彼ら二人に集中させる必要からとられた処置とみられる。それはまた輝元を中核とする毛利新体制の布石でもあった。
- (2) 河合正治「小早川隆景と毛利両川体制」『芸備地方史研究』一六・一一七合併号。
- (3) 山陰支配における吉川元春の位置づけに関しては、瀬川秀雄『吉川元春』（昭和十九年）、『島根県史七・八』（昭和三・四年）を基礎文献として、『鳥取県史2中世』、日置桑左衛門「戦国期山陰における毛利氏と国衆」、『地方史研究』四九、同「天正十年高松城講和前後の因伯」、『古文書研究』七・八合併号、河合正治「小早川隆景と毛利両川体制」、『芸備地方史研究』一六・一一七合併号）などがあるが、主として元春の軍事行動に視点が向けられ、その支配構造に関しては、当初は代官的な性格を有していたが、織田信長との戦争が激化する天正八年以降になると因伯の支配を全面的に担当する、という日置氏の見解や、山陰地方は元春が管理統轄し、山陰諸国の国衆は元春との関係を深めてゆく、という河合氏の見解を除けば、かつて内藤中氏が「毛利—吉川氏の支配につ

いての詳細はわからない」（『島根県の歴史』山川出版社）と指摘した段階から進展していない。このため筆者は、尼子領国占領後の山陰支配を、尼子本領の富田支配の継承と元春の役割を中心に検討を行ない（戦国大名毛利の地域支配—出雲・富田の検討—）『歴史学研究月報』二四六、これをもとに池享氏は、毛利氏の山陰支配を吉川による人格的支配の側面から検討を加えた（戦国大名領国支配の地域構造—『歴史学研究』八〇年大会報告別冊）。しかし池論文は本宗支配の限界—吉川支配の成立という図式を描いたため、領国全体のなかでの吉川解明の道をとらず結果となり、残された課題も多い。なお小早川隆景に関しては、『三原市史』が現在の研究の到達点としてあげられる。

- (4) 本文中の史料の出典は、以下のように略記する。
- 『萩藩閥閥録』二卷二頁三二号—閏二—二—三二
- 『萩藩閥閥録遺漏』四四頁一—閏遺四四—一
- 『大日本古文書 吉川家文書』八六号—吉八六（以下、毛利・小早川・吉川家別集なども、それぞれ毛八六・小八六・吉別八六というように略記）
- 『鰐淵寺文書の研究』収録文書、ならびに号数—「鰐八六」

一 毛利家の吉川家掌握と石見支配の成立

(1) 毛利家の吉川家掌握

毛利と吉川家。中国山地の山麓に位置する安芸国高田郡吉田（毛利）と、山間部の山県郡大朝（吉川）をそれぞれ

の本領とし、互いに所領を隣接するこの両家は、毛利弘元（元就の父）の娘が吉川元経のもとに嫁ぎ、元経の妹妙玖が元就に嫁いで隆元・元春・隆景の母となるなど、元春相統以前から関わりが深く、元就の代には、ともに出雲の戦国大名尼子氏に属していた。なかでも石見国界沿いの大朝を本領とする吉川家は、その地理的關係から石見国衆の益田・三隅・福屋氏らと相互協力の盟約をとりかわすなど

（明応八年／吉三六二〜四）、石見との関わりが深く、血縁も、毛利家を除けば、一族の石見吉川氏をはじめ、小笠原・福屋・出羽氏など石見に広く及んでいた（『近世防長諸家系図綜覧』）。さらに国経の妹は尼子経久のもとに嫁ぎ、国経・元経・興経の三代には、尼子方国衆として、政治的にも、血縁的にも、石見・出雲の国衆と断ち難い絆を結んでいた。

ところが天永五（一二二五）年、元就が大内方に転じたことから両家の関係は次第に疎遠となり、天文五（一五三六）年、元就は山県郡を侵攻し、同九年には吉川興経が尼子氏の毛利攻めに参陣して元就の居城である郡山を攻撃した。その後興経は、毛利攻めの失敗により、十一年、石見・出雲・備後の尼子方国衆十三人（福屋・出羽・本庄・三沢・三刀屋・古志・宍道・河津・三吉・高野山・山内・宮）と共に大内方に転じ、大内義隆より所領を安堵されるが（吉川家譜一、吉三八六）、翌年に行われた大内氏の尼子攻

めが大敗すると再び尼子方に転じ、「吉川所帯」は義隆から吉川一族の毛利氏に宛行われた（毛二五九）。このうち興経は、元就の要請により義隆から赦免されたと伝えられるが（『陰徳太平記』卷十六）、これを機に元就は、当時十八歳であった次男元春を興経の養子相統という形で吉川家の掌握にのりだし、同十五年七月、吉川家の宿老から興経の隠居と元春相統にあたっての条件を提示させた（吉四三三）。

この相統の直接的な原因は、興経の失政に苦しむ吉川宿老側の求めによるものと毛利側の史料は伝えるが、三十九歳の興経を隠居させ、子息千法師を排除してまで元春の相統を強行したことを重視すると、その真相は、吉川家掌握を前提として興経の失脚を狙った元就が、吉川一族の経世らを懐柔して家中の分裂をはかり、元春相統の要求を吉川側から提出させたものとみなされる。

こうして天文十六年二月、元春の相統が実現すると（吉四一九）、元就は、同年閏七月二十八日から八月二十五日にかけて、元春の署名を目下にすえ、相統の特異性ゆえに自らも加判した、「任興経一行之旨、当給地之事、不可有相違」（二宮木工助宛）などと記す代替りの連署安堵状を発給し（四点確認⁽¹⁾）、八月には興経を毛利領の布川へ強制移住させ、翌十七年には吉川一族の宮莊父子を領外に追放するなど、反毛利派の肅清を強行した（吉川家中系図）。更に毛

利派の吉川経世と、その嫡子経好、次男の今田経高からも三度にわたり起請文を提出させ（吉二六・七・四三八）、なかでも経好へは、毛利領市川への「蟄居」と市川姓への改称を命じて本宗家臣に編成し、吉川家からの分離を図った（閏四一五〇）。

こうした強行策の一方、十七年、元就は、吉川家居城の受け取りにあたって主家の大内氏に軍隊の派遣を要請し、更に十八年には元春と共に大内義隆に拜謁して、吉川家相続の裁許と吉川家当主の代々の官途である「治部少輔」を得、翌十九年二月、はじめて元春を吉川家本領の大朝新荘に入部させる、という手続きを踏んでいた。⁽³⁾つまり吉川家の掌握は、大内氏からすれば尼子攻めに大敗した大内領国の再建政策の一環としてなされたものであり、毛利氏からすれば、大内氏から相続裁許を得たのちに、石見国衆の小笠原長徳が元春の吉川家相続を祝して、「不相易、長久得御扶持、可致奉公」と元就に申し送っていたように（吉四三三）、吉川家を媒介として大内方の石見国衆から「奉公」の誓約をとりつける契機となったのである。

元春の入部にあたっては、毛利譜代の次男・三男で構成された三十六名が随行し（吉川家譜二）、十九年二月十六日付で元春から吉川領内で知行を宛行われている（六点確認）⁽³⁾。なかでも随行者の筆頭とみられる福原元正（譜代家

臣筆頭の福原広俊次男）は、領外に追放された宮荘家の名跡を相続し（のち元春の三男経言が相続）、小河内基清も吉川家重臣の朝枝家の名跡を相続するなど、吉川家の掌握は、その一族・重臣にまで及んでいた（吉川家中系図、吉川家譜）。元春家臣団となる吉川衆は、彼ら随行者と、森脇をはじめとする吉川家譜代層によって形成されたのである。

ついで九月二十七日、元就は、隠居させていた吉川興經父子を殺害し、ここに吉川家の掌握を完成させた。こののち元就は、同二十二年、石見の福屋隆兼（妻は妙玖姉）と小笠原の所領相論に介入し、「福・小笠・吉川無二申談候へハ長久可然」と元春を通じて両者の和談をはからしめるなど（吉一一六五）、吉川家を通じて石見国衆との関係を深める。一方、元春に対しては、相続は「当座之物」であるから「毛利之二字、あだおろそかに思食、御忘却候ては、一円無曲事」と語って毛利家の一員たることを強調し（毛四〇五）、その権力の一翼を担わせてゆく。それは天文二十四年から開始される石見支配のなかで固められていった。

(2) 石見支配の成立

天文二十三年、大内氏から自立し早急に軍事力の結集を迫られた元就は、防長への侵攻計画を進める一方で、元春

を通じて石見国衆の帰属工作を開始する。翌二十四年には、大内とも、尼子とも「手切」れて毛利・吉川に「入魂」の意を表明した福屋隆兼と、大内方の永安式部少輔との領土紛争に介入し、福屋への加勢として元春を石見に侵攻させた（吉四五二）。更に同年十一月、安芸嚴島で陶晴賢を敗死させると、防長侵攻と並行して、元春をはじめ、元就の娘婿にあたり吉川家とも血縁関係のあった安芸国衆の穴戸隆家、⁽⁴⁾ならびに毛利家の譜代家臣のなかでは福原家に次ぐ家格をもち、石見の口羽を領した口羽通良の一軍を石見に投入し、弘治三年までに小笠原長雄を除く石見国衆を帰属（「一味」）させ、石見銀山も占領した。ついで永禄二年、毛利主力軍を石見に投入して小笠原を降伏させると、小笠原本領のうち、居城のある河本などを代所宛行を条件に収公して元春に「預ケ進」め、元春は自己の家臣を「河本当番」に配置して吉川家の支城として編成した（吉四五八）。

こうして開始される石見支配のなかにあつて、吉川本領と石見銀山の中間に位置する河本の吉川領化は、旧城主の小笠原が天文年間に銀山を一時掌握していたこと、⁽⁵⁾毛利氏は銀山占領後、降伏した城将刺賀長信らの本領を安堵し、そのまま銀山山吹城を守備させていたことからすると（閏二一五五）、軍事的要衝としての役割にとどまらず、銀山

支配の布石として注目される。銀山は、占領まもなく尼子氏に奪われるが、永禄五年、これを奪還すると、本宗家臣の平佐・上山両氏とともに、吉川家臣の山県小七郎、ならびに石見国衆で吉川一族でもあった吉川経安を山吹城の城番に任命し、なかでも経安には、銀山休谷に設置された銀山支配の役所である「銀山休役所」の管理を命じるなど、⁽⁶⁾銀山なくば、弓矢もならず、と言われ（輝元書状／吉一九六）、毛利領国の重要な財源となる銀山の支配も、本宗家支配のみならず、吉川家を参画させる形で進められたのである。

次に石見侵攻時における元春の性格は、弘治三年に大内方の益田藤兼を元春が単独で講和調停した時、益田と対立する毛利方の長門国衆吉見正頼の毛利離反を懸念した元就の言葉によく示されている。このとき元就は、元春の扱いについて、「我等に少茂不被屈、元春被操とは、吉見をはじめ候て、人は存候ましく候、悉皆元就存候而、元春にあつかはせ申候と可被存候……元春之操を一円存候ハぬとハ世上には存候ましく候」と述べ、「言語道断」と批判した（閏二一八五八・九）。つまり「人」「世上」は、元春の行動を父元就の意思の代弁者として見ている、というのである。元春は、元就の指揮のもとで元就の外交面を代行したことから、石見における元春の行動は元就の行動そのもの

と意識されていた。それ故に石見国衆は、毛利氏に対する自己の要求の取り成し（「吹拳」）を元就と最も近い関係にある元春に依頼する。例えば、天文二十四年、元春の加勢を得て永安領を占領した福屋隆兼は、「当時別而得御指南」たと自らを元春の指揮下に位置づけ、「弥次向後、拙者進退之儀、無御見除可預御異見」きことを元春に申し送るとともに、「ケ条之旨、被成御分別、元就御父子江預御意得候」と、元就・隆元父子への知行安堵の吹拳を依頼した（吉四五一〜二）。このとき福屋は自己の要求を実現するため、まず元春の「御分別」を得て吹拳をとりつけねばならず、元春は、この毛利家への奏者としての役割を通じて石見国衆に対する地位を次第に強化してゆく。

このような吹拳は国衆にとどまらず、地下人層との間にもみられる。永禄四年、福屋隆兼の離反により福屋領の「市山地下人」の懷柔を元就から命じられた元春は、井下三郎兵衛ら市山衆九人の要請を受けて「於有忠節者、対申旁、別而加扶持」えることを誓約する起請文を記し、このうち井下・寺本姓の四人には、「於忠節者、領地之事、福屋代一倍可遣置」と申し送って給地の倍宛行を約束した。更に井下新兵衛には恩賞として蔵入地の管理を担う草使任命を元就とともに約束している。このうち元龜二年の井下弥次郎への譲与安堵状も元春から発給され、井下・寺本ら

を指導層とする市山衆は、元春のもとに編成された（岩国藩中古文書纂二）。

しかし石見の下級家臣すべてが元春のもとに編成されていたわけではない。例えば弘治二年、元就・隆元は、都賀行の「城番」として本宗家臣の岡光良を配置し、同郷にて七十貫を宛行っているが、この場合は、岡が同郷の下級家臣を編成したものとみられる。また元龜元年、出雲杵築浦への警固船派遣にあたり、元就は、「石州ニ小浦抱衆中」に「堅固可裁判之由申付、児玉美濃守、至温泉津差遣」すと共に、元春へも「益田方など都野已下浦もち衆へ能々可被仰催」と命じており、そこには、①浦を中心に結集する海辺小領主層「小浦抱衆」と、②浦支配をおこなう益田・都野氏ら「浦もち衆」と呼ばれる国衆の二つのグループに対する命令系統が存在していた（関一五一一〜二）。このうち「小浦抱衆」は温泉津に派遣された本宗譜代家臣の児玉美濃守の指揮下に編成され、温泉津警固衆ともいふべき山陰における毛利直属水軍を形成したのに対し、「浦もち衆」、すなわち国衆への動員は元春から執達された。つまり石見支配において元春が果たす主たる役割は、下級家臣の編成よりも、こうした国衆の統制にあったのである。かれら国衆は帰属にあたって本領を安堵され、新たに給地を宛行われて毛利氏との主従関係を形成するが、たびたび毛利氏と

起請文を取り交すなど、なお対等な関係を維持していた。

石見国衆とかかわりの深い吉川家の当主たる元春は、こうした国衆の統制役として石見支配のなかにあらわれてくる。そしてその統制は、元春自身、元就・隆元に宛てて「石州表……我等取次申候共、所帯其外追而之儀、兎角可為御意」と述べていたように、国衆と本宗家との取り次ぎ役を通じて進められた。この結果、国衆のなかには防長侵攻時に毛利氏と同盟し、隆元の娘を妻とした吉見氏のように毛利本宗家と直接むすびつく者も存在したが、福屋・益田・石見吉川・周布・都野・佐波氏など、多くの国衆は帰属当初から元春を奏者とし、その内容は、所領安堵の要求や、毛利氏から約束された知行宛行の履行要求（「愁訴」）をはじめ、毛利氏に対する忠誠（「御届」）や、その表明として毛利氏に送付する重代相伝の刀の送付依頼（益田藤兼）など、主従制の根幹に関わる事柄を内容としていた。このため国衆にとっての元春は、毛利氏への意思伝達をおこなう上で重要なパイプとなったばかりか、毛利本宗家側も、国衆に対する起請文の転送（「企一紙告文候、可有御伝達」）などを元春に依頼し、国衆宛の書状末尾に「猶從吉川元春所、可申入候」と明記するなど、元春を通じて国衆支配を進めていった（関一八六三・十二）。こうして元春は、本宗家の国衆支配を補完する担い手として石見支配

を推進してゆくのである。この元春を軸とする国人領の総体を、河本などの吉川支城領とあわせて、石見吉川領と呼ぶことにしよう。永禄八年には、石見最大の国衆である益田藤兼が「近年之儀、元春以御取成、忤家連統之御恩、至子々孫々ニ茂存忘間敷事」を元春に誓約したように（益田文書十二）、国衆は元春の「取成」しを「御恩」と認識し、元春への信頼を強めていった。

こうしたなか益田藤兼に対しては、本宗家の指示のもとに娘を藤兼の子息元祥に嫁がせ、血縁による統制も図っている。この婚姻は、隆元生前（永禄六年死去）より交渉が進められ、同八年、この婚姻を機に取り交された起請文では、藤兼より「吉田奉対御家長久無二之以覚悟、乍勿論、弥可抽無二之馳走忠節之事」という誓約をとりつけ、元春は「内々輝元其外家中之者、可申聞事」を誓約していた。ここに記される「馳走」とは、ありふれた言葉だが、たとえば出雲国衆の赤穴宛書状に、「御人数御馳走之儀、偏頼存候」、あるいは「彼表一途儀者、弥御馳走頼申候」などと記されるように、その言葉のもつ意味は毛利氏の軍事動員に應じることを意味し、「忠節」の内容も、天文二十二年の元就・隆元の軍法書に、「動かかけ引之儀、其日ノ之大将の背下知候者ハ、可為不忠候」と見え、戦場における指揮・命令系統を乱したものが「不忠」とされたことからす

れば、必ずしも主従を内容とせず、軍事命令の遵守に力点があった。⁽¹⁰⁾つまり「御馳走」・「忠節」を誓約させる目的は、国衆を毛利氏（具体的には吉川）の軍事指揮下に編成することにあつたのである。しかもそれを確認する元春が、輝元の名を特に列記している点は注目される。この二年前に当主隆元が急死し、孫の輝元の自立化を急いだ元就は、永禄八年に輝元を元服させる。その同じ年に元春が益田氏と起請文を取り交して結びつきを強化したのも、新当主輝元の地位強化を一つの目的としていた。これは元春から益田に宛てた起請文の二条目によく示されている。そこにおいて元春は、この婚姻と、益田との相互の「奉公」の誓約は、本宗家の計らいによるものであり、益田が「対輝元、無御等閑、御深重ニ於被仰通者、我等事、対御家、誠悻家之限、可致奉公事」という一文を明記する。すなわち益田—吉川の二領主間協約が成立する前提には、輝元への「馳走」「忠節」という条件があつた。そしてこの条件の存在によって、益田と吉川の相互関係の強化は、輝元の地位強化へとつながってゆく。石見国衆を元春のもとに編成させた本宗家は、元春の地位を強化することで石見における本宗家の支配の浸透を図っていったのである。

注

(1) 広島県史V巻八九頁、同巻一三三頁、吉川家文書別集三二

九号

(2) 吉川家文書四二九～四三一・四四二・六〇八号

(3) 広島県史V巻八二・八三・一〇四・一〇八・一三一頁、吉川家文書別集七三四号

(4) 宍戸隆家の曾祖父元家の妻は、吉川経信の娘にあたる（『近世防長諸家系図綜覧』）。

(5) 小葉田淳「石見銀山」（戦国大名論集14『毛利氏の研究』）
△吉川弘文館V所収

(6) 老翁物語、吉川家譜五、石見吉川家文書二六・九〇号

(7) 関三巻七二頁一～四号。城番者がその地域の地下人を編成している事例は、周防国山代五ヶ地方における高森城主坂元祐と山代衆の関係などから確認できる（拙稿「戦国大名毛利氏と山代一揆」『歴史学研究月報』二二七、池亨「戦国大名の権力基盤」戦国大名論集14『毛利氏の研究』所収）。

(8) 関三巻一巻八六頁一～八号、同二巻六三七頁十四号、同三巻五八〇頁一九八号、石見吉川家文書九・九二・九四号など。

(9) 益田文書四（東京大学史料編纂所蔵写真真帳）

(10) 関三巻二巻一六頁八号、同巻一七頁一一号、毛利家文書六一三三

二 山陰支配の展開

(1) 出雲富田支配の成立

永禄五年、福屋隆兼の離反を機に尼子領への侵攻を開始した毛利氏は、同年、出雲の洗骸崎（松江市）に本陣を構

築して尼子氏の居城である富田城（能義郡広瀬町）の攻撃を開始する。同七年には伯耆・因幡まで勢力を拡大するが、尼子方の抵抗も根強く、戦いは四ヶ年に及び、同九年十一月、ようやく城を開城させて吉田に帰陣した。ここに尼子領国を継承する新たな山陰支配が展開する。それは、①尼子氏の本領であつた出雲富田支配、②本宗家臣在番として派遣した富田城以外の支城領支配、③国衆支配の三つに大別され、なかでも①と③は、山陰支配の要となつた。そこでまず、出雲富田支配の成立から検討してゆくことにしよう。

永禄九年、富田城を接収した毛利氏は、安芸国衆の天野隆重に「在番」を命じ、隆重の補佐役として、譜代家臣の長屋小次郎・新藤就勝の両氏と、旧尼子家臣の野村士悦を配置した（長屋寛書）。このうち在番者筆頭の天野隆重は、毛利一族の宍戸隆家や吉川一族の熊谷信直と共に毛利氏の軍評定に参画し、永禄六年には毛利領国の最前線であつた豊前松山城の在番を勤めるなど、元就の信頼が厚く、富田在番にあたつては、翌十年七月に富田城の位置する能義郡にて八百貫、ついで十二年十二月にも能義・島根郡内にて千七百貫という、実に本領の七倍にもおよぶ給地を宛行われ、このうち出雲に在国した。⁽¹⁾次に長屋小次郎の詳細は不明だが、新藤就勝は、永禄十年に「雲州郡役」を賦課した

「富田奉行中」の一人とみられ、同十二年には天野隆重とともに連署状を發給し（後述）、元龜ノ天正初年頃、出雲鰐淵寺領への諸役賦課を禁じた本宗家の奉行人奉書の宛所にも「赤川・新藤・井上・其外奉行中」と記される。⁽²⁾また野村士悦は、尼子給人の分限の大小を熟知していることから、尼子から毛利へ帰属した現形衆への堪忍料支給といふ、いわば戦後処理のため一時的に配置されたもので、元就から「毎事、隆重任指南、用心以下可申付」と命じられていた（長屋寛書、関三・一六七～一七）。

このように毛利氏による富田支配は、安芸国衆を中核に、毛利譜代層と尼子旧臣を参画させる形で開始された。このうち在番者の中核となる天野隆重の發給文書は、永禄十二年七月二十五日より残存し、發給形態から、I富田奉行の新藤就勝との連署段階（永禄十二年八月）、II隆重の単独署名の段階（同年九月～元龜元年二月）、III元龜元年二月に富田に入城した元就の五男元秋との連署段階の三期に分けられ、富田体制の変遷を読みとれる。このうち新藤と連署するI期の文書は、II期の文書とともに、尼子勝久の攻撃によって籠城を強いられていた時期に發給されたもので、その内容は、①隆重と共に籠城する毛利家給人の給地要求（「愁訴」）を毛利氏へ吹挙したもの（一点）、②愁訴受理者に対し、毛利氏の命令をうけて給地を打渡したもの

（二点）からなり、隆重はいずれも目下に署名した。富田支配が天野を中核とし、譜代家臣等を参画させた形で進められたことを書式の上からもうかがえる。なお②の一点は、新藤の次に能義郡代官の玉木忠吉が加判しているが、これは打渡地が能義郡内に所在したことによる。

ところが尼子軍の包囲が続く同年九月二十七日以降になると、連署形式が消え、いずれも隆重の単独署名となる。その変化は、富田城内から離脱者があらわれた九月二十三日の翌日、内部結束を固めるため隆重父子と在番者の玉木・野村ほか四名との間で元就・輝元への忠誠を誓約する起請文（『諸家証文』所収）を取り交した直後から現れており、城内の動揺を押さえるため、在番者筆頭の隆重へ権限の集中化が図られたことを示している。この点から隆重が単独で文書を発給する時期は、さきの連署段階とは異なる富田支配の第Ⅱ期として位置づけられる。その内容は、Ⅰ期の①②（五点）のほかに、籠城者の軍忠吹挙状（二点）からなり、この形態は、富田城が毛利軍によって救援される元龜元年二月まで続けられた。

二月十六日、尼子勝久に包囲された富田城を救援した毛利氏は、元就の五男で、周防国衆の梶杜家を相続していた元秋を「城番」として富田城に入城させ、新たに「富田」姓を名乗らせる。ここに富田支配は、新たな段階（Ⅲ期）を迎える。旧領までを含めて、富田支城主の給地として再編成していたのである。

元秋の入城にともない、隆重は富田城西方の高津場城（八束郡八雲村）に移るが（閏二一六八七）、元龜元年二月より現れる元秋の発給文書三十四点のうち、五点に隆重は加判し、元秋・隆重を宛所とする文書も五点ある。このほか普請役賦課や給人の愁訴吹挙などに関する隆重単独署名の文書も元秋期に六点存在し、両者の併存状況がみられる。但し連署の場合、一点を除いて元秋は常に目下に署名し、隆重が単独で発給する場合も、愁訴吹挙を依頼された出雲の湯原に宛てて「元秋申談、芸州江以使者令申候」と返答し、更に毛利氏への愁訴吹挙にあたっても「定而元秋可有御申候、吾等茂最前之辻、如存仕候之間、不顧斟酌旁迄申入候」と述べていたように、常に元秋の名前を明記していた。つまり隆重は、あくまで元秋を補佐する立場にいたわけである（閏三一四六一一三三〇四）。愁訴吹挙にあたつて隆重が「最前之辻如存仕候」と述べていたように、尼子降伏後の戦後処理以来、富田に在番し、在地状況を把握していた隆重は、十九歳で新たに富田城の城番になった元秋の補佐役として元秋文書に加判し、文書を発給したのである。このほか元秋の要請を請けて本宗譜代家臣の南方就正も富田に派遣され、元秋の使者をはじめ、在地給人への応

た。すでに元秋は、隆重が富田在番を命じられた翌十一年六月十日付で城番を元就・輝元から命じられ、出雲で三千五百貫を宛行われていたが、九州出陣のため任につかず、給地も未定であった。このため帰陣後の十二年十二月十九日、改めて富田莊七百貫をはじめ、能義郡内で三千五十貫、隣接する意宇郡内で百五十貫、秋鹿郡内で三百五十貫の計三千五百五十貫を打渡され、一年半遅れで入城した⁽⁴⁾。その給地は富田城周辺に集中し、元秋に尼子本領を継承させたことを想定させる。このことは、『閏閏録』（享保年間成立）の元秋の項に「給尼子旧領内三千五百貫」とあり、富田入城以前に元秋が相続していた梶杜家の項にも「尼子之家を元秋様江被進」とあること、また元秋を「尼子元秋」と記していた点にも示されており（閏一三三四、同七三四）、元秋と尼子家との間に養子・姻戚関係は存在しないが、元秋は尼子の家を継承したものと認識されていた。そればかりでなく元秋の給地には、尼子から毛利氏に帰属した宇山久信の本領能義郡赤江百貫が含まれ、宇山は帰属後、元就の本領安堵の約束を論拠に旧領安堵を求める愁訴をおこなったが、輝元は、元秋の同意を得られないことを理由に宇山の訴えを却下し、彼には赤江の代所として延福寺のうちで百貫を宛行った（閏二一九二七三、同九三〇一五・一）。つまり毛利氏は、尼子本領はもちろん、その周辺の尼子旧臣

対、元秋・隆重書状への加判など（湯原宛、一点）、隆重とともに元秋を補佐した⁽⁶⁾。

こうした元秋を頂点とする富田支配の成立は、これまで国衆に支配を委ねていた段階と比べると、一族を中核にすえ、より直接的な支配体制の確立をめざしたものと評価できる。しかも元秋の富田入城と前後する永禄十二年、元就は厳島を統制する安芸桜尾城にも譜代家臣の桂元澄に替えて四男元清（元秋の兄）を入城させ、元澄の五男広繁が元清を補佐する体制を築いていたことからすると、元秋の富田入城は、領国の南北の要衝に一族を配置するという領国支配の強化をねらって行われた政策とみられ、永禄末年より始動する、吉川元春・小早川隆景・福原貞俊・口羽通良の四人が新当主輝元を補佐する新体制固めの一環として位置づけられる。そしてこの一族を富田支城主に任命するという政策は、天正十三年の元秋死去後も、元秋の弟元康を入城させることで継続された⁽⁸⁾。

次に、富田支城主の主な職務には、①「北前」の押さえとしての富田城守備、②諸役の賦課、③出雲の郡使統轄、④給人の愁訴吹挙の四点があった。このうちまず諸役の賦課について、元龜三年、毛利氏の命を受けて出雲国島根郡の加賀城に在番した湯原からの城普請許可を例に検討すると、湯原の申請をうけ元秋と隆重は、吉川・小早川・福

原・口羽を通じて本宗家にこれを取り次ぎ、普請許可の回答を得ると、これに基づいて隆重は、「加賀要害縄結替岸切之事、近辺之村江上意ニ候間、元秋申談、仕配仕候、五・六日之間ニ調可申」と湯原に執達した(閏三・四三三・二六、同四六二・二二四)。この手続きによると、在番者はもちろん、現地支配者である富田支城主においても管轄下の城の普請許可権と普請役の賦課権はなく、その行使は本宗家の承認を必要とし、それ故に賦課は「上意」という形で実施された。つまり出雲支配における富田城番者は、本宗家の命令を受けて現地で実務の処理を担うものとして位置づけられていたのである。元就・輝元から守護不入の権利をとりつけた鰐淵寺が、その証判を元秋のもとにも提出して安堵を要求したのも、彼が諸役賦課の実務を担っていたことに起因しよう(鰐二七一)。

こうした諸役のないには郡単位の賦課も存在し、永禄十年には「富田奉行中」より「雲州郡役」が賦課されている(閏二・二一三・三)。また天正三年から五年にかけて行われた鰐淵寺の本堂造営工事においても、各郡に夫役徴発を命じた本宗家の奉行人奉書は、元秋奉行人から各郡使に執達(「仰触」)された。このとき能義郡使から「能義郡之義者、程遠候間、近辺之者可相雇」という要求がなされたが、この場合も元秋奉行人は、これを本宗奉行人に取り

次いで指示を仰ぎ、「余郡並ニ普請可被仰付」という本宗家の回答を執達している(鰐三〇六・三二〇)。ここにみえる郡使とは尼子期の郡奉行を継承したものと推察されることから、毛利氏は、尼子期の郡奉行の任免権を掌握した上で、改めて郡使として富田支城主のもとに編成し、これを毛利宗家たる吉田が総轄する、という支配機構を出雲に打ち立てていたことになる。富田支城主の第三の職務は、この郡使統轄にあった。

第四の職務としては、出雲の寺社・給人の愁訴を毛利氏(本宗家奉行人、もしくは権力の中核にいた元春・隆景・通良・貞俊の四人)へ吹挙することがあげられる。この関連文書は二十点あり、隆重・元秋の発給文書の三分の一にあたる。その手続きを神官田辺・曾我父子の場合で示すところのようになる。

①永禄十二年、富田に籠城する田辺・曾我父子は、富田八幡宮の横屋職を宛行われていた佐藤新兵衛が尼子氏に通じたのをとらえて、「横屋職」と「右京大夫跡」を要求する愁訴を隆重におこない、隆重は九月二十七日付で、これを吉田に吹挙することを約束した。②隆重からの愁訴の吹挙を受けた輝元・元就は、田辺父子の出雲における「忠儀」を記す隆重の吹挙状をもとにして、三ヶ月後の十二月二十日、「望之地事、無余儀可遣」という愁訴受理の文書

を隆重に発給する。③同月二十八日、隆重は、この回答(「御兩殿御判」)を田辺に遣わして、「富田八幡宮横屋職并宇賀庄八幡宮領」を打渡し、同日付で、原田・波佐間両氏より坪付が発給された(竹矢文書)。

この一連の手続きによると、まず「愁訴」の受理は、愁訴者の毛利氏に対する「忠儀」が重要な判定基準になっていることを指摘できる。したがって富田支城主(右の場合には隆重)の吹挙状が極めて重要な意味をもつことになり、石見支配における吉川同様、この愁訴吹挙によって、富田支城主は出雲における自己の地位を強化していった。しかもこうした愁訴吹挙は、すでに見たように国衆湯原氏の加賀在番の免除や、鰐淵寺の寺領安堵の際にもみられ、戦時下の富田籠城者に限定されなかった。このほか愁訴ではないが、元亀二年、元秋は湯原に対し、本宗家からの指令伝達のため富田へ「一人可被指出」と命じており、出雲給人層への命令も富田を経由する場合があった(閏三・四六一・一二二)。また出雲秋鹿郡にある高宮神官の吉田招聘にあたっては、馬・人足は富田から支給された(高宮旧記)。

このように尼子領国の拠点であった富田は、毛利領国下においても出雲支配の要衝としての機能を維持したが、発給文書の宛所などから明らかにしうる管轄範囲は、能義郡内をはじめ、隣接する島根・楯縫・意宇郡といった宍道湖

周辺にはほぼ限られ、出雲一国に及んでいない。とりわけ尼子時代から守護不入をとりつけ、自律的性格を維持してきた赤穴・三刀屋(飯石郡)・三沢(仁多郡)などの有力国衆に対しては、楯縫郡久木をめぐる三刀屋・野村両氏の所領相論に関する裁決執達のように、係争地が富田管轄内である場合を除き(閏三・六二二・三二二)、国人本領内に関わる指令、あるいは軍事命令などの文書が発令された形跡は見られず、占領直後に発令された富田城普請と推察される「雲州郡役」も国衆本領は免除されていた(閏二・二一三・三)。更に伯耆以東の給人に富田から指令が発令された形跡もみられない。これらの点から毛利領国の富田は、旧尼子本領(能義郡)の継承と、能義郡、ならびに宍道湖周辺における給人の愁訴吹挙・給地打渡し、また諸役賦課をはじめとする出雲における郡使統轄を担う支城として編成されたものとみられ、当初から出雲一国の支配を担うものとして編成されたものではなかったのである。したがって毛利氏の旧尼子領国支配は、一支城たる富田をもって貫徹したわけではなく、このため毛利氏は、かつて富田のもとに編成されていた各支城を本宗家直属の城に編成して新たに在番者を配置するとともに、富田支配とは別に出雲以東の国衆支配を担う新たな支配体制をここに確立しなければならなかったのである。

(2) 出雲・伯耆国衆支配の展開

出雲における尼子国衆は、毛利氏が出雲に本陣を構築した永禄五年、すなわち尼子降伏以前に、ほぼ一斉に毛利氏に帰属する。このとき毛利氏は、赤穴久清の本領五百貫を安堵（合点）し、さらに本領に対する「天役郡役」も免除するなど（閏二―一五―一、同二―一三―三三）、国衆が尼子時代から有していた諸権利を承認した。このため国衆はこののちも度々毛利・吉川両氏と起請文を取り交すなど、なお対等の関係を維持し、山陰支配の一つの障害となつてゆく。しかしその一方で、毛利氏は積極的な政策も試みていた。例えばさきの赤穴に対しては、尼子晴久から宛行われた多久和本郷五十貫をはじめとする本領以外の当知行地二百六十四貫を、本領安堵の二ヶ月後に改めて「進置」き、諸役の賦課対象地とした。⁽¹³⁾更に同年、赤穴領を尼子攻めで通過した際には、赤穴を居城の泉山から「御下城」させ、かわつて毛利軍を一時駐留させるなど、本領以外の領土・公権の掌握を進めながら、その居城の支城化をはかっていたのである（閏二―一六四、閏三―四六―三三）。

こうした政策は、出雲支配と並行して進められた伯耆支配にとりわけ顕著にみられる。伯耆国は、東伯三郡・西伯三郡の計六郡からなり、南条・行松などの国衆の本領が所在したが、大永四年、彼らの多くは尼子氏によって国を追

われ、永禄五年頃、毛利氏の援助を得て数十年ぶりに本領を回復した。なかでも南条宗勝は、「芸州以御威光、入国仕、年来依御引立、当三郡（東伯の河村・久米・八橋郡―筆者注）無違儀被仰付」られて、伯耆最大の国衆としての地位を保障された。⁽¹⁴⁾この経緯に示されるように、伯耆は毛利氏の政策基調を最も良く示す地域といえよう。その第一の方針は、国衆の本主権の回復、すなわち本領安堵にあった。更に南条領内にあった前將軍義輝の「御位牌所」である京都相国寺光源院領の還補問題によると、元龜二年、南条とともに幕府・院主から還補の要請を受けた輝元は、翌正月、「先御代御位牌所之儀候之条、有御分別、御還補之段、尤可然」と記す書状を南条に発給し、南条の「御分別」を促す形で還補要請をおこなった。⁽¹⁵⁾つまり毛利氏は、国衆の本領を回復しても、それに直接関与することはなく、むしろ国衆の地域支配を基礎として支配を展開してゆくことを基本政策としていたのである。その上で、南条に安堵した三郡のひとつ久米郡に本領をもつ在地領主山田重直を毛利の直臣に編成し、永禄十二年、南条「宗勝ニ相副、伯州表差上」しを命じて南条の居城羽衣石（東但郡東郷町）に「差籠」らせるとともに、永禄七年頃より伯耆で給地の打渡実務などに従事していた毛利家臣の小寺元武を一時的に同城へ在城させるなど、南条権力へのテコ入れも図っていた。⁽¹⁶⁾このうち

山田は、元龜二年、元春を通じて東伯耆における毛利氏の最大の支城である八橋城の在番を命じられるなど（山田文書）、毛利直臣としての性格を持ち続けるが、元龜年間から天正初年頃、南条宗勝から「長々御在身」により三十石を宛行われ、天正七年には南条信正・泉養軒長清・津村基信・島羽久友とともに、南条領河村郡内の山論裁許の奉書を発給するなど、南条家の奉行衆にも参画している。⁽¹⁷⁾その契機は、天正三年、自らの死期を悟った宗勝が若き元統の後見を山田に託したためと伝えられるが（吉川家臣覚書一）、翌四年、山田は元春の命を受けて、織田信長に内通した南条家臣の福山を処罰し、同七年、南条が織田に通じるにあ

て本領を安堵された石見・出雲国衆とは異なる伯耆国衆の特質であり、尼子氏に本領を追われ、四十年近くにわたって在地を離脱していた国衆の脆弱な権力基盤を強化するためにとられた政策であった。それが更に推し進められると、西伯の行松領のように国人領そのものの掌握へと及ぶ。

行松正盛も、当初は南条とともに本領を回復されて西伯の要衝尾高泉山城（会見郡、現米子市）に在城したが、同七年に死去し、その跡は元就の命によって行松の後家と結婚した杉原盛重が相続した（森脇覚書）。この杉原は備後神辺を本領とし、天文年間の杉原家相統にあたつては元春の強い吹捧を得たと伝え、永禄元年の石見攻めなど、早くから山陰において元春と軍事行動を共にし、また毛利興元の娘（元就の姪）を妻としたことから、永禄五年以降は、国衆では穴戸・熊谷（吉川一族）・天野とともに毛利氏の軍評定の席にも参画したという（森脇覚書）。つまり西伯の杉原領は、毛利氏による国人領の掌握と、西伯の支配強化をめざして新たに設定されたものであった。尾高入城後、杉原は占領地域の会見郡の天満城の普請を命じられ、それが完了すると自己の家臣を派遣して尾高の支城に編成し、同十年には会見郡内にて寺領安堵や知行宛行などを実施している。⁽¹⁸⁾そしてその中核となる尾高城は、元春の伯耆・因幡方面における重要な軍事拠点としても機能した（閏一

戦国期山陰吉川領の成立と構造（館鼻）

一七四二—一三二二など。また伯耆方面に発給されている毛利氏の文書を検討すると、「今日盛重・南条所江申遣」（久芳宛元春書状）、「因州之越、追々蒙仰度候、南条被仰合、御加勢肝要」（杉原盛重宛、隆景書状）というように、杉原は、南条とともに伯耆の重鎮として位置づけられ、このものの伯耆支配は、この両者を中核としてすすめられてゆく（閏三—四九二—二七・三三）。

以上のように、毛利氏による国衆支配は、本領安堵を基軸とし、国人の地域支配を承認強化する形ですすめられた。毛利氏は、こうした国衆による地域支配を前提にしながら、その上に自らの権力を打ち立ててゆくのである。従来、毛利氏の山陰支配については、国衆の自律性を重視し、それ故に支配の不徹底さが指摘されてきたが、今後は、南条支配にみられるような国衆の地域支配を前提とし、そのテコ入れをはかりながら領域支配を進めてゆく側面を重視すべきであろう。そしてこの国衆を本宗家に代わって統制するものとして、吉川元春は山陰支配のなかにあらわれてくる。

註

(1) 閏閏録二巻七七四頁三三〇、同巻六八一頁二・三三〇、同六八七頁、森脇寛書

(2) 中川四郎家所蔵文書（東京大学史料編纂所蔵／閏閏録二巻二一頁三三・三三三）。なお三二・三三三号文書の付年号は、

原本によれば、いずれも本文とは異筆であり、年次は、内容から永禄十年に特定できる。

(3) 鰐淵寺文書三〇五号。赤川・井上は、元亀元年に富田支城主になる元就五男の元秋の奉行人。

(4) 閏閏録一卷三四頁一・二二二。元秋が九州に出陣していたことは、閏五月五日付の南方就正宛書状（閏二—二二六—二〇）から確認できる。また元秋の富田入城日に関しては、同じく南方宛の書状に、「我等事、去十六入城」とある（閏二—二四四—五六）。

(5) 元亀三年に比定される五月十二日付の湯原春綱宛書状のみ日下に隆重が署名する。但し、奥ウハ書とみられる部分には元秋が署名した（閏三—四四九—一〇九）。

(6) 閏閏録二巻二四二頁四六六、同巻二四三頁五一号、同三巻四二七頁九号、同巻四六〇頁一一六号

(7) 『広島県史 古代中世資料編Ⅱ』解説参照

(8) 閏閏録一卷三四頁三三〇、同巻三七頁、毛利家文書一二六八—九号

(9) 元亀四年、輝元は、雲州内大原郡・為石郡々役并大東代官職之事、任因幡守手続、全令存知、諸役等可申付事」を、多根因幡守（飯石郡の尼子旧臣カ）の養子となった譜代家臣尼玉元信に命じている（閏三—一九六—一九）

(10) 鰐淵寺文書二五四号。なお同書では、元秋を小早川姓に比定するが、これは富田（毛利）元秋の誤りである。

(11) 毛利領国における富田支城主の位置づけに関しては、現在、④出雲における公的支配体制の確立を目指したが、国衆を服属させるだけの権威・権力がなく、未整備に終わった、とす

二八。

(13) 閏閏録二巻二〇頁二五五号。宛行状に記載される多久和五十貫は、天文十三年に尼子晴久から宛行われた給地であり、これらが尼子時代からの知行地であったことを確認できる（閏二—三一—一八六）。

(14) 天正三年、南条元統（宗勝子息）起請文（吉川家文書六一—三三）

(15) 光源院文書（大日本史料十編之四）。なお大日本史料では、還補の御内書を元亀元年に、輝元書状を元亀二年に比定するが、「毛利父子（元就・輝元）かたへも申遣」（御内書）とありながら輝元の単独署名であること、内容などからすると、御内書は、翌二年、輝元書状は元就死去後の翌三年のものとして推察される。

(16) 閏閏録一卷七四二頁三六六、同一巻七四二頁三六六号。山田は、大永二年、父高直の代に南条らとともに尼子氏によって本領を追われたが、重直の代に毛利氏によって本領を回復された。永禄十二年当時は九州に出陣中であつた（吉川家臣覚書／山田右衛門佐）。

(17) 閏閏録一卷七四八頁七〇号、三朝町区有文書（鳥取県史二 資料編）

(18) この点を最もよく示しているのが、吉川元春・小早川隆景・福原貞俊・口羽通良の連署状である。元就子息の元春・隆景は、必ずどちらかが日下に署名し、一方は奥に署名する。ついで日下署名者の次に譜代家臣の筆頭の地位にあった福原が署名し、その次に口羽が署名した。つまり毛利家内部での地位は、日下から数えて①③④②という署名順に反映していた

(12) たとえば永禄五年、熊谷広実（信直三男）を出雲須佐高矢倉要害の「城督」に任命し、同国にて六百三十五貫を宛行い（閏二—二二五—四四）、同七年には伯耆八橋城に「八橋城衆」を五、六十人配置している（閏二—二二六—四三）。また富田城外壁として出雲十旗の一つに数えられた高瀬城には、元亀二年から口羽通良の次男春良が在番した（閏一—七六—四）

のである。このほか大永三年、元就に宗家相続を要請した家臣団の連署状においても、日下に福原広俊（貞俊父）、奥に福原に次ぐ家路をもつ志道広良（通良兄）が署名し（毛二四八）、永禄九年、尼子氏の降伏にあたって取り交した毛利氏の起請文や、同十二年高橋鑑種との起請文も、元就・隆景・元春・輝元の順に署名し、新当主輝元は、次席を示す奥に署名していた（佐々木文書、毛二四二）。こうした署名順に注目すると、天正十九年から開始される給地替え（惣国座替）にともなう打渡状（穂田元清以下八名連署）の奥に、秀吉に直結する安国寺惠瓊が署名していたことは、毛利領國の変革が豊臣政権の指導のもとに推進されていたことをうかがわせる。

（19）関関録一卷七三九頁二七号、『鳥取県史 中世 資料編』二五〇・二六三・二八八号

三 吉川領の成立と構造

（1）山陰吉川領の成立

永禄五年、出雲に侵攻した元春は、出雲・伯耆戦線の軍事指揮官の一人として尼子攻めを担当し、尼子降伏後も、暫く出雲に残留して鎮撫にあたった。しかし尼子領国占領後、出雲以東の国衆支配が直ちに元春のもとで進められたわけではなく、たとえば永禄十年、郡役免除の本領に「雲州郡役」を賦課された出雲の赤穴久清は、その免除確認の

吹挙を、毛利氏への帰属の際に労をとった毛利家譜代家臣の口羽通良に求めていたし（関二二二・三三二・三三）、永禄十二年、出雲の三刀屋久扶からの愁訴を受けて同人宛に発給された知行宛行状も、尼子攻めにおいて三刀屋城に布陣していた宍戸隆家、ならびに口羽通良から執達された（三刀屋文書）。こうした点からすると、当初の国衆支配は、帰属状況や戦時下の連携などをつうじて、元春のみならず、宍戸・口羽といった一族・重臣によって個々に進められていたものとみられ、石見国衆のように、本宗―吉川―国衆という関係は明確には形成されていなかった。ところが元亀元年九月になると、これを元春のもとに編成してゆく動きがあらわれてくる。その直接の契機は、この年の正月、尼子勝久の挙兵によって毛利軍が再び出雲・伯耆へと出陣した時に行われた軍事指揮権の委任に求められる。

このとき元就は、七十四歳という老齢のため出陣せず、吉田から指示を与えていたが、毛利軍が勝久の抵抗に苦戦するなかで病にたおれ、急報を受けた輝元・隆景は、九月、「元春并方角之衆少々残置」き、吉田へ急ぎ帰還する（関二一三七・三一三）。このとき輝元は、出雲の赤穴に宛てて「弥元春・隆家被仰談之、御馳走肝要」と命じ、元就も出雲の湯原に対し「毎時、元春・隆家可被相談事、肝要」であると命じて、元春・宍戸隆家の軍事指揮下にはいるよう

に指令した。更に隆景からも「我等事、今日下向之」「元春・通良能々申渡候、切々至御両所、御注進干要」と、同主旨の要請がなされている。^①しかもこの元春・隆家・通良への指揮権委任を公表する本宗家の直書は、赤穴宛にとどまらず、湯原宛の元春書状に「爰許、我等被残置ニ付而、旁御馳走頼存候通、従元就、如此以直書、被申入候」とあるように、元就より「旁」に当該地域の国衆に広く発給されていた。さらに元就は、十月十七日、毛利水軍を指揮して日本海に出陣していた譜代家臣の児玉就英に對しても、「元春・隆家・通良、能々可有談合」と命じて、元春らとの談合を指示し、児玉の帰還する際にも、「元春ニよく／＼申届、得候候て可罷帰」と命じるなど、元春・通良・隆家への軍事指揮権委任の指令は、国衆にとどまらず、当該地域で戦闘に従事している毛利軍全軍にゆきわたっていた。^②ここに山陰支配は、軍事指揮権の付与という形を通じて、吉川元春・口羽通良・宍戸隆家という、これまで国衆と本宗家との取り次ぎを個々に担ってきた彼ら三人を中核とする新たな展開をみせはじめる。

まず、この軍事指揮権の付与ともなう、国衆の軍忠は元春・通良を通じて本宗家に吹挙された（隆家に関しては未詳）。たとえば元亀元年十月、湯原は、出雲佐陀江（満願寺江）における軍忠を元春と通良に上申し、これを受けた

両人は、連署で「則吉田江可致注進」ことを約束する。そしてこの吹挙を受けて吉田（輝元・元就）は、「馳走之段、祝着之至候、猶従元春所、可申候」と記す感状を発給した（関三一四二・八一、同四二九・一六）。このように彼らの吹挙が感状発給の条件となったことは、山陰における彼らの軍事指揮権を補強する。しかもその吹挙や軍事指揮は、元春単独ではなく、宍戸と口羽を参画させた、いわば集団指導体制をとっていた。このことは山陰支配が元春の意思のもとに独自に推進されたものではなく、あくまで本宗家支配を介在させながら進められたことを示している。しかしながら元春が彼らと全く同レベルにあったわけではない。元春は常に日下に署名し、さきの湯原の軍忠も、元春・通良から本宗家に吹挙されたが、本宗家からの感状には「猶従元春所可申候」と記され、元春のもとから執達されていた。また元春が単独で軍忠を吹挙することもあり、国衆をはじめとする給人の愁訴を本宗家が受理する際にも「任元春吹挙状之辻、令裁許」というように、元春の吹挙状が重視された（千家文書九）。国衆と起請文関係を推進してゆくのも三人のなかでは元春のみに見られる特徴である（後述）。とりわけ軍事面に占める元春の地位は大きく、元亀二年、出雲新山城の「城誘」のため、現地に赴任中の本宗家臣井上・新藤（富田在番）、ならびに野村（富田・出雲末次な

どの在番を歴任）を「普請奉行」に任命した輝元は、元春へも「一兩人被相副、急度普請堅固可被仰事、肝要」と申し送り、元春のもとからも普請奉行を派遣するよう命じていたし、天正初年、因幡鹿野城に在番する野村から在番の交替要求がなされた時も、輝元は「元春令相談可申付候」と返答するなど、山陰の軍事は元春の指導のもとに展開していた。また国衆支配に関しても、先にとりあげた光源院領の還補をめぐる南条宛の輝元書状の末尾に「猶從元春可被申候」とあるように、還補要請は元春のもとから執達され、光源院からも元春に直接還補要請が行われた。更に寺領還補にあたっては、元春書状に「委細小寺并此者可申述候」と記され、本宗家臣の小寺元武と「此者」、つまり吉川家臣とが両使を構成して南条のもとに派遣されるなど、出雲以東の国衆も次第に元春のもとへ編成されてゆく（光源院文書）。

こうして元龜元年九月以降になると、出雲以東においても次第に元春を中核とする山陰支配が展開しはじめてくる。しかもこの年は、毛利領国において大きな転機を迎える年でもあった。まず本宗家内部では、永祿末年から元龜元年にかけて、まもなく喜寿を向かえようとしていた元就の指導のもと、吉川・小早川・福原・口羽の四人が新当主輝元を補佐する新たな体制づくりにとりかかり、同じころ防長

においては、山口奉行と防長四郡段銭奉行を置いて地域支配の整備がおこなわれた。⁽⁶⁾また元龜年間には、小早川隆景が沼田川をさかのぼる新高山城から内海交通に直結する三原城に本城を移し、九州・上方の情報収集や警固船の指揮にあたるなど、瀬戸内海方面の支配を推進してゆく。更に地域支配の要衝となる各支城には、元秋（富田城）、元清（桜尾城）、元政（安芸国衆天野家相統、隆重とは別家）ら、元就の子息を配置して、その強化を図っていた。すなわち元春を中核とする山陰支配の展開は、一地域支配の整備にとどまらず、元就指導のもとで進められた輝元を中心とする新たな領国支配づくりの一環として行われたものであった。ここに、かつての尼子領国は、元春による広域支配「山陰吉川領」として、毛利領国のなかに編成されてゆくのである。

(2) 起請関係の推進

元春による山陰支配、とりわけ国衆支配の特質を最もよく示すものに、国衆との間で取り交された起請関係の推進がある。すでに元春は、永祿九年から出雲以東の国衆とも起請文を取り交しはじめるが、この時期のものは隆景との連署形態をとり、「此上者、不可有御表裏之条、此方之儀

茂、勿論無疎意可申談候」と記すなど（元龜元年五月、出雲大野高直・大垣秀康宛）、隆景とともに毛利権力を代表する形をとって署名・誓約していた。⁽⁸⁾これに対し隆景が帰陣し、元春が山陰の軍事面を統括する元龜元年九月以降に取り交

された古志重信宛の元春起請文では、「自今以後、重信、対芸州、於御悪心者、勿論又元春茂、対玄蕃助殿無御等閑、長久別而可申談之事」、つまり「芸州」＝毛利本宗家への「悪心」なくば、元春も「等閑」なく「申談」する、という元春と国衆との誓約を含む形に変化し、元春は本宗家を中核として国衆との強化をはかっていた（吉一四六五）。

しかもその起請者は、古志・三沢・三刀屋・山内など、かつて吉川家が尼子方国衆だった頃に離反行動を共にするなど一揆的關係をもっていた家々であり（前述）、その締結は、元龜二年と天正三年にはば集中して行われた（表参照）。

そこで、このなかでも繰り返し元春や毛利氏と起請文を交換している出雲国衆の三沢為清と元春の起請文を通じて、国衆編成の特質を検討しよう。

〔起請交換者一覧〕

年 月 日	氏 名	性 格	出 典
元龜元年十一月二日	古志重信	出雲国衆	吉一四六五
元龜二年四月 五日	三沢為清	出雲国衆	三沢家文書
元龜二年七月二三日	湯原春綱	出雲国衆	関三―四三一―二二
元龜三年八月 一日	山内元通・隆通	備後国衆	山内首藤家二四七
天正三年四月二四日	三刀屋久扶	出雲国衆	吉六一一
天正三年五月 五日	三沢為虎	出雲国衆	吉六六二
天正三年五月二八日	山名祐豊・氏政	但馬国衆	吉五七七
天正三年十月一四日	南条元統	伯耆国衆	吉六一三
天正三年十月一四日	小鴨元清	伯耆国衆 (南条一族)	吉六一二
天正三年十月一四日	南条清綱ら一五名	南条家臣	吉六一四
天正七年六月二六日	草刈重継	美作・因幡国衆	関一―八〇四―一〇
天正七年六月二六日	黒岩上佐守ら九名	草刈家臣	関一―八〇四―一一

如仰、貴家御事、最前以来、
対芸州被仰合、以御馳走當国之
儀被任存分候、然處、依九州干

戈、雲伯衆悉御下向候、就其緒半人、窺此方隙乱入候而、既國中無殘雖相隨候、以為清御入魂、富田之月山儀被差救持拔、九州各上国待付、（元龜元年二月）布部合戦以來、於所々得勝利、於于今者相極新山一城候、如此被仕返候事、御方偏對芸州、重疊御屈之故候、因茲、自吉田茂對御家別而領地等被遣置候之段、永不可有御忘却之由蒙仰候、元就・輝元之儀者不能申、於吾等茂本望存斗候、左候間、拙者事、御兄弟一分ニ被思召、於氣遣之儀者、可被別御心之由預候、誠雖謝存候、然上者、勿論吾等事、存御兄弟之筋目、對貴家、無二申談可致奉公候、於此上者、自然和譏之儀候者、無御腹藏可預御尋候、又承之儀者可申入候、（以下神文、略）

吉川駿河守

元龜元年卯月五日 元春（花押）

三沢左京亮殿

（三沢文書）

出雲国仁多郡を領する三沢は、永祿五年に毛利氏に帰属して以来、天正十三年に至るまで、七回に及ぶ起請文を毛利本宗家や元春に提出しており、帰属後もなお自律的性格

を維持した国衆の一人であった。右の起請文は本宗家宛のものを含めると二度目のものとなり、その内容は大きく三つに分けられる。まずはじめに、尼子勝久との合戦における三沢の馳走を謝し、その功により毛利家から給地が与えられたことを永く忘却しないよう誓約を取り付けている。勝久の挙兵により国衆のなかには尼子方に転じるものも少なくなかったが、三沢は毛利方にとどまり、永祿十二年、出雲・隠岐・伯耆にて二千四百貫を宛行われた（三沢文書）。毛利氏はこれを被宛行者よりわざわざ確認させることで離反防止に努めねばならなかったのである。その上で元春も三沢との関係強化に努め、そこに持ち出されてきたのが「御兄弟一分」、すなわち兄弟同然という論理であった。この「御兄弟の筋目」により、元春は、三沢と「無二申談」じ「奉公」することを誓約する。

この「御兄弟一分」という文言は、国衆との起請文に常に記されるものではないが、元龜三年の山内隆通・元通父子宛の元春・元資（元長）父子起請文に、「既元通・元資可為御兄弟之由、申合候上者、我等父子事見放不申、無二申談、不可存別儀」とあり、天正五年の多賀元忠宛の吉川元長書状にも「於向後者、御兄弟一分ニ長久可申談」、また同八年の石見国衆周布宛の元長書状にも「御方我等事、可為御兄弟之由、蒙仰候、尤太慶」と記されていたことが

らすると、吉川は、国衆との関係を兄弟同然という横の連帯を媒介として強化しようとしていたとみなされる。つまり吉川による国衆統制は、前述した益田にみられる婚姻と、三沢のような兄弟同然という血縁原理を通じて推進されていた。しかもこの「兄弟一分」という、いわば対等の文言を元春が提示したことによって、国衆に対する輝元の地位は、「御方偏對芸州、重疊御屈」と明記されたように、一段高いものとして位置づけられた。更に元春と国衆の関係も、元龜・天正初年のうちは、「兄弟一分」の文言を起請文に記しているが、天正五年の多賀宛や、同八年の周布宛になると起請形式をとらなくなり、吉川による国衆統制も年を経るごとに次第に強化されていったことをうかがえる。こうして国衆との紐帯を強化した元春は、毛利と国衆との間に「和譏」が生じたときは心中隠しだてなく自分に照会することを要請する。他者からの讒言により国衆との信頼関係が喪失することを毛利氏は極度に恐れており、起請文のほとんどにこの文言は記載される。とりわけ三沢と起請文を取り交した元龜二年は、尼子勝久との戦闘中に元就が病むという危機感があった。すでに輝元を新当主としながら、元就の国衆に対する影響力は強く、輝元の発給する国衆宛の文書には死ぬまで加判し続けていたし、元龜元年、出雲に出陣中の元春・隆景は、秋上庵介の毛利「一

味」をより確実にするために、吉田の元就に、秋上宛の書状発給と銀子宛行を要求しなければならなかった（毛五八二）。かつて隆元が元就の隠居は「家の崩れ、国の崩れ」と述べていたことは、決して誇張ではなかったのである（毛六五八）。事実、三沢宛の起請文の二ヵ月後に元就が死去すると、早くも湯原春綱の毛利離反風説が生じ、元春は七月に湯原とも起請文を取り交さねばならなかった。しかもそこには「以御神誓、御方父子心底之越、重疊被申越候、祝着候、其方事、既吾等一字申談候上者、勿論不可有御等閑」とあり、元春は七月以前にも湯原と起請文を取り交していた（閏三―四三二―三二）。こうした点からすると、あえてこの時期、元春に国衆と起請文の交換をおこなわせたのは、元就死去後に予想される国衆の離反をくいとめるために兄弟同然という論理によって相互の紐帯を個々に強化し、元春のもとに結集させようとしたものと推察される。

このうち三沢は、軍事編成上は安戸隆家の「御一手衆」に編成されており（閏一―六〇四―一〇）、湯原も富田城主の毛利（富田）元秋を毛利本宗家との奏者としていたことからすると（前述）、この起請関係の推進は、軍事編成や奏者とは別の、より高いレベルでの取り交しとなる。しかもこのように広範囲の国衆と起請文の取り交しをおこなうのは、本宗家を除けば吉川と小早川（瀬戸内方面の国衆）に

限られていた。ここに元就の次男である吉川元春と、三男小早川隆景のみが広域支配を形成しうる大きな理由があったのである。そしてこの起請文の取りかわしを契機に、出雲・伯耆、さらには因幡の国衆までもが次第に吉川のもとに編成されてゆく。

こうしたなか元春は、天正三年、再び国衆と起請文を取り交す。すでに尼子勝久は出雲を撤退して京都へ逃れていたが、天正元年に織田信長の援助を受けて再び因幡に侵攻し、一時は鳥取城も尼子方の手に落ちた。さらに天正二年、因幡における毛利方の重鎮であった武田高信が戦死し、翌三年には東伯耆の南条宗勝も死去するなど、出雲・伯耆方面は再び緊張化におかれた。出雲に出陣した元春が国衆と起請文を取り交すのは、かかる状況下においてであり、出雲の三刀屋が「我々内証之儀共、不残心底候申上之處、被聞召入、有御納得、成御一通被下候」と記す起請文を元春・元長に提出したように（吉六一）、その第一の目的は、再び毛利離反の風説が生じた国衆の結集をはかることにあった。しかもこの時の起請文交換は、これに加えて新たな目的があった。まず提出者の一人、三沢為虎は、元龜二年に元春と起請文を交換した為清の嫡子であり、提出先は元春の嫡子元長であったこと、また三刀屋久扶の起請文は元春・元長宛であるが、本文では「吾等事も別而内外共ニ被加

御意、御引立可忝候、於身も確可致馳走事」を元長に誓約していたこと、このほか多賀元忠も、このとき出雲平田で元長と「互以一通申談」じたことを天正七年の書状に記していたことからすると（関四一九〇—一九一六）、この時の起請文は、元長と国衆との間で取り交された性格をもっていた。そればかりか三沢為虎の起請文に、「乍恐御兄弟一分ニ被思召、無内外預御引廻、万事被御覽統候而可被下事、所希候」と記されていたように（三沢文書）、かつて元春と為虎の父為清との間で結ばれた「御兄弟一分」の関係を、それぞれの子息の代にまで継承することになった。

こうした点から天正三年の起請文は、今後も山陰の国衆支配が「吉川家」によって遂行されることを表明したものとみられ、同七年以降になると元春・元長の連署状も発給されるなど、吉川家は山陰国衆の統制者としての性格をより明確にしてゆく。次の南条の起請文も、その一端を示している。

天正三年、当主宗勝が死去した南条家は、その跡を子息元統が相続し、同年十月、元統は、「此節別而被副御心、自今以後、悴家弥長久相続候様ニ毎篇可被加御意事、所希候」と記す起請文を元春・元長に提出し、毛利・吉川への誓約を改めておこなう。ここで注文されるのは、同日付で伯耆の小鴨家を相続していた元統の弟元清、ならびに南条

信正をはじめとする南条家臣十五名が元春・元長に提出した起請文の存在である。その主旨は当主元統と同じだが、「芸州江之儀者不及申上、対元統向後無二不可構逆心候」と記す一文が追加され、南条家臣らは、毛利家への忠誠のみならず、新当主への忠誠までも吉川から誓約させられていた。これによって元統の地位は、毛利、直接的には吉川を背景として強化されることになった。さらに元統の人間質は、毛利の本城のある吉田と共に吉川の本城のある新庄に差し出され、元春は、一族経世の三男経久の娘を養女として元統に嫁がせたと伝えられるなど、吉川は国衆の編成にとどまらず、そのテコ入れを本宗家にかわっておこなっていたのである。⁽¹⁾

同じころ石見についても元長を軸とする新たな動きがおこってくる。天正初年、元長は、石見福光城主（温泉津町）の一族吉川経家に宛てて「石州辺より上の事をハ万事被御心付候て給候ハ、可目出度候、彼口ニ身を一ツ置申たる思をなすべく候」と申し送り、経家を自らの分身にたとえ、石見から上口、すなわち石見銀山・出雲方面への心配りを促すとともに、「一年之半分も爰元ニ御座候様ニ候て可給」と申し送って、半年は吉川本領の新荘に居住することを要請した（石見吉一三三）。しかも経家の所領が日本海側に面していたことからすると、その支配強化は、安芸

新荘（石見河本（吉川支城））経家領という、吉川本領から日本海への縦断ルートの確保を意味し、それは吉川の山陰支配を軍事面から支えるものでもあった。

以上のように、元就の晩年に形成された元春による国衆支配は、かつて尼子方国衆であった吉川家の歴史性を背景に、元就の次男元春による兄弟同然という横の連帯の強化を通じて推進され、それは天正初年の外庄のなかで嫡子元長を含む形へと整備・強化されていった。山陰吉川領とは、こうした国人領の複合体としての性格をもっていたのである。

(3) 愁訴吹拳と領域支配

石見支配における元春、富田支配における元秋に示されるように、地域支配者が自らの地位を強化してゆく上で大きな役割を果たしたものに、在地給人からの知行宛行要求などを本宗家に取り次ぐ「愁訴」の吹拳があった。元龜以降、出雲以東の地域と吉川との関係が密接になると、元春の愁訴吹拳は、石見のみならず、出雲から因幡にかけての給人層に及んでゆく。ここでは、再びこの愁訴の問題を通じて、毛利・吉川家による地域支配の構造を検討してゆく。その一例として、まず中島元貞の愁訴をとりあげる。

元龜元年十二月、尼子勝久の軍事拠点であった出雲新山

城を攻略する間、新山に近接する羽倉山城の在番を命じられた本宗家臣の中島元貞（譜代家臣と伝えるが未詳）は、①「防長雲州之間、弐三拾貫前」の給地を在番の恩償として要求し、②これを受けた元春・口羽通良は、「中彦申通、慥令承知候、右趣涯分可申調候条、在番堅固可相動」と返答して、中島彦五郎（元貞）の要求を本宗家に取り次いだ。③翌年三月、輝元は、「元春任被申聞旨、雲州弓矢以一着之上、給地可遣置」という給地の宛行予約状を中島に発給するが、④この宛行は出雲平定後も履行されず、元春は、輝元の宛行予約状の副状を発給した内藤元榮に「中島善左衛門尉、申分之儀」について輝元への「御取成」を依頼し、「彼仁事、羽倉御番堅固ニ申届、別而馳走」と、中島の軍忠を記す吹拳状を発給して、再度宛行の履行を求めなければならなかった。

この一連の宛行手続きによると、給人は新規の宛行なしには新たな軍役に応ぜず、このため現地の軍事指揮官たる吉川元春・口羽通良は、軍事行動の円滑化をはかるため宛行の吹拳をしなければならなかった。それは内藤の副状に「從元春様、以被仰出之旨、上様御分別候て、被成御書候」と記されるように、宛行吹拳の「仰出」を「分別」する決定権を輝元が掌握していたためであり、輝元が宛行を履行しないときは、④の元春書状に「去年以来申入」と記され

るように、給人の軍忠を繰り返し吹拳しなければならなかったのである。こうした吹拳には口羽通良も関わっているが、輝元が「元春任被申聞旨」と記し、内藤もこれを吉川からの「仰出」と明記していたように、受理にあたっては吉川の吹拳がより重い意味をもっていた。これは元龜三年、出雲の国造千家が杵築社領に関する愁訴のため出雲在陣中の元春のもとに赴き、吹拳状を得て吉田に下向した事例にも良く示されている。このとき元春は、元就代以来の「御忠儀之所、輝元事者付及申、於我等少も不致忘却」と千家に返答して吹拳を約束し、元春からの吹拳を受けた輝元も「先年元就・隆元証判旨、并任元春吹拳状之辻、令裁許候」と千家に返答するなど、愁訴の裁許には、元就・隆元の証判とともに元春の吹拳状が大きな影響力をもっていたのである（千家文書九）。それ故に愁訴者にとっては、自己の功績を熟知し、在地状況を把握している吉川の吹拳を得ることが、自己の要求を実現するための大きな鍵になった。山陰における吉川の地位は、この愁訴吹拳を通じて補強され、さきの起請関係の推進とともに、山陰吉川領を支える要になってゆく。

こうした給人の愁訴は極めて多く、毛利領国の特徴ともいえる。その背景には、出雲の湯原に宛てた元春書状（天正七年）に「依無明所、不相調候、於何方角茂似合之儀候

者、吉田申整可進置候」と記されていたように、「無明所」という給地不足があった（閏三―四三七―三八）。毛利氏は征服地での宛行を条件に軍事動員をおこないながら、一方では帰属者の旧領安堵を原則としたため必然的に給地不足が生じ、宛行不履行から多くの愁訴が発生してくる。まさに愁訴の多発は、毛利領国の矛盾を体現するものであった。しかも天正三年に出雲の三刀屋が元春に提出した起請文に、「御判之地、于今所々相支候、幸御父子様当表被成御存知義候間、以御取合御判下之儀、弥致安堵、永々吉田様へ致忠義候様ニと且夕挿心底候」と記していたように（吉六一一）、国衆は、輝元への忠義を知行安堵と引き換えて要求し、その吹拳を在地状況を把握する元春に求めている。このことはまた、宛行不履行が国衆の毛利離反に通じる深刻な問題であったことを示している。しかもそれは国衆にとどまらない。吉川の指揮下に置かれた本宗家臣の小寺元武も宛行不履行のなかでの吉川からの動員を「迷惑」と述べており、吉川は小寺の「最前以来馳走」の様子を吹拳しつつ、「明所」を少しでも宛行うよう、本宗家の奉行人に「御取成」しを要求しなければならなかった（閏二―二二七―四七）。一方、愁訴裁定権を独占する本宗家は、これら多発する愁訴に対し、一部宛行や、浮米宛行、反銭免除などをおこなうことで急場をしのぐが、明所不足を理由に、これを却

下する場合も少なくなかった。この場合、愁訴の吹拳と、その裁定基準が愁訴者の毛利氏に対する忠義の浅深にあったことから、宛行予約を条件に新たな軍事動員を課し、宛行予約↓動員↑不履行↓愁訴↓宛行予約を繰り返すなかで矛盾を回避する一方、山田重直の愁訴差戻しにあたり、輝元が「明所等聞出愁訴候へハ、聊不可有無沙汰之由被仰聞、先々被差返、可然」と元春へ返答したように、給人自らが明所を探して再度愁訴することを指示し（山田文書）、その後給人が明所を探して再度愁訴したときは、これを検地したうえで宛行した（閏三―四七一―一六二）。この結果、給人の明所要求の強さは、明所報告↓検地↓宛行の手続きにより大名の在地掌握の深化をもたらしことにもなったのである。そのうえ本宗家が愁訴裁定権を独占したことにより、領国における本宗家の公的地位は強化され、これを取り次ぎ吹奏する吉川もまた、愁訴者宛の返書に、「輝元申伺」、「輝元江茂御同心候様、可申伺候」、「至吉田申伺」というように、輝元を前面に明記したことから、新当主輝元の存在は、この返書を通じて在地に広く浸透していった。これは起請関係を推進するなかで輝元を前面に出した政策と同じ動きととらえられる。つまり吉川による山陰支配の強化は、一地域支配の強化にとどまらず、本宗家支配の強化につながる構造をもっていたのである。吉川の持つ極めて

重要な役割は、こうした宛行不履行からくる給人層の不満を吹替することによって緩和するとともに、輝元を前面に押し出すことで本宗家の支配を在地に浸透させてゆく点にあった。したがって元春による山陰支配、すなわち山陰吉川領の強化は、毛利領国総体の強化でもあったのである。

(4) 寺社興行権の分掌

山陰支配における吉川の役割は、これまで検討してきた本宗家と国衆の主従関係を補完する面にとどまらず、毛利家の公的支配も分掌していた。その一つに有力寺社の興行があげられる。

毛利家による山陰の有力寺社の造営は、「神国」と意識された出雲を中心に、尼子勝久を放逐した天正初年より始められ、このうち杵築大社と一体化して出雲一宮を構成していた鰐淵寺の本堂再興（天正三年～五年）では、石見から因幡、更には備後北部にかけての「此方裁判之国衆」と「郡中」から広く材木と人夫を徴発し、天正四年の出雲八重垣社造営でも出雲国神門・能義・小原郡に、同十一年の日御崎社造営でも「任先例、雲伯石三ヶ国」に、それぞれ棟別銭を賦課している。⁽¹⁶⁾これらの賦課は「国中之儀」、「先例」を論拠としておこなわれ、日御崎社造営の際、三沢為虎が出雲「仁田郡之儀者、此等之役目雖不仕来候、可

任御錠候」と返答していたように、諸役免除の国衆本領（石見国衆六・出雲十・不明一）から寺社領（二）、さらには当該地域に給地を有する毛利家臣（五）にまでおよぶ、一國平均役として賦課された。⁽¹⁶⁾

このうち鰐淵寺本堂再興のため、毎年「国中」の「催」という形で石見・出雲・伯耆・因幡・備後にかけて賦課された材木は、①輝元、②毛利家奉行人であり、寺奉行でもあった国司元武・児玉元良、③吉川の三者を通じて諸国の国衆（石見四・出雲六・伯耆一・因幡二・備後二・不明三）に執達され、国衆からの返書も彼ら三者に宛てて、それぞれ発給された、また、このとき材木の出港を命じられた因幡国衆の武田豊信が「津出可申付旨、最前自元春蒙仰候、任御下知、人足百人申付、遂馳走候キ」と本宗家奉行人に返答し、山口好衛が「山出之事者、人足等、無調法之事候間、難成候、津役之儀者、拙者承知之事候間、可申付候」と、津出のみ承知する旨を元春に返答するなど（鰐三四〇・三四六）、現地での具体的な指示は元春のもとからなされていた。これは天正四年の八重垣社造営でもみられ、段銭賦課を命じる本宗家の奉行人奉書に、「委細、從新庄可下仰理候」とあり、詳細は吉川のもとから執達されていたし（千家文書九）、同十一年の日御崎社造営についても、神社宛の輝元書状に「頓社頭成就候様ニ元春被仰談、御才覚肝

要」と記されていた。更に「国旁」＝国衆への棟別銭賦課にあたって派遣された両使も、国司元武宛の元春書状に、「国旁江被成御意候条、我等茂一人相副、可申理之通、無御余儀候、何時成共可差上候」と記され、前述した南条領内の寺領還付要請と同じく、毛利・吉川双方によって構成されていた（日御崎神社文書／『新編島根県史料編』）。これは国衆が元春のもとに編成されていたことによるものだが、そのことはまた、国衆への要請は元春の介在なしでは充分な効果をもたなかったことを示しているよう。

こうした吉川＝国衆という賦課体系とは別に、出雲では、富田＝郡使による郡単位の賦課体系が存在したが（前述）、富田城のある能義郡使の夫役遅延に対し、輝元が「其表御出之事候、被付御心、郡使江可被仰聞」と元春に申し送っていたように（鰐三〇七）、元春は郡使への督促権も輝元から委任されていた。また天正十一年に出雲国の神魂神社が落雷によって焼失したときも、その急報は、まず富田城の元秋を補佐する天野隆重のもとにもたらされたが、これを受けた隆重は、「早々新庄へ御注進肝要」であると神主に指示し、元春の本城である新庄へ注進された（八重垣神社文書／『意宇六社文書』）

以上の点から明らかなように、一國公権にかかわるものと推察される社寺造営は、鰐淵寺や神魂神社のように、た

とえ造営対象となる寺社が富田城の管轄域にあったとしても、一地域の支配者たる富田城主には委ねられず、旧尼子領を中心とする石見から因幡にかけての広域支配を分掌する吉川が、その任を担ったのである。これらの地域を吉川領と規定する理由は、この点にも求められる。

(5) 吉川領支配の強化

天正四年、毛利氏は、淡路を占拠して織田信長の包囲する石山本願寺を救援し、翌五年には播磨に侵攻して信長との戦争に踏み切った。これに対し信長は、同年、羽柴秀吉を播磨に派遣し、同七年、備前の宇喜多、東伯耆の南条をあいっいで帰属させ、八年には播磨・但馬を平定して因幡へ侵攻させた。この侵攻を毛利側は因幡「再乱」ととらえ、秀吉軍の伯耆乱入を警戒する。

こうして次第に戦局が悪化すると、輝元・隆景は備中・美作方面への出陣を繰り返す、吉川元春・元長に対しても、新たな権限を付与することで山陰支配の強化を図った。その一つに軍事動員権の付与がある。これまで吉川は、軍事指揮権は付与されていたものの、独自に国衆らを動員することはなく、たとえば元龜二年、因幡の武田動員は吉田の直書をもっておこなわれ、天正元年、野村士悦に発令された因幡鹿野城の在番命令も、輝元から野村に命じられ、

在番日数などの詳細は、元春・通良・元俊（福原貞俊の嫡子）の連署によって執達された。⁽¹⁸⁾これが天正七年以降になると、同年十月に発令された湯原への動員令や動員期間（「先廿日之逗留にて御打出可為本望候……翌日御打立候之様ニ内々御支度肝要」）、また同九年の吉川経家への鳥取在番命令など、いずれも吉川父子から直接下され、吉川による国衆支配は、一段と強化されている。⁽¹⁹⁾

この動員権の付与にともない、国衆らへの恩賞も吉川から直接宛行われた。それは、天正八・九年、とりわけ秀吉軍が因幡に侵攻した天正八年に集中して発給されている特徴をもち、宛所は、山陰国衆をはじめ、吉川の指揮のもとに編成されていた本宗譜代家臣にまで及ぶ。その内容は、①「今度南条、对此方、相構逆意候条、可及行候、然者御馳走之由誠祝着候、仍於伯州御愁訴之地、条郡之内下津和分三百石……（略）……進之置候、弥御忠義肝要候」（伯耆福頼宛）というように、給人の愁訴を認め、給地を宛行ったもの（八点）、②「羽衣石一着之上」で「伯州」にて知行を宛行うことを約束したもの（五点）、③在番にともなう宛行の大きく三つに分けられ、このうち①の愁訴対象地が東伯耆の三郡、すなわち南条の領内であること、例示した福頼は、それを南条攻めの恩賞として宛行われていたこと、また②の「羽衣石」とは南条の居城をさすことから、①②

天正九年四月に湯原に宛てた打渡状に、「末次・黒田百貫之内五十貫之事、從吉田可被成御扶持問之事、拙者令裁判進置候、全可有知行事肝要候」とあり、知行宛行は吉田、すなわち輝元からなされているものの、給地そのものは吉川のもとで賦られ、打渡されていた（関三―四四三―五三）。このことは、本宗家奉行人よりも吉川家奉行人のほうが在地状況をより細かく把握していたことを示している。

次に②の一例として出雲の宇山久信の場合をみよう。天正八年四月、美作の辨形在番にあたって、宇山は元春より「羽衣石一着之上、於伯州百石之地、可進置之候」と記される宛行状を得る。それは、羽衣石落城後、という条件が明記されていたように、宛行の予約状という性格をもち、同年七月に元春が再確認した文書にも「羽衣石一着之上、坪付等可進置候」と記されていた（関二―九二九―八〇）。このように②の宛行状は、①のように愁訴を受けておこなわれたものではないため給地も明記されず、宛行予約の形式をとるが、その予約地は①同様、南条領を対象とし、吉川は、これを予約することで最前線の在番を履行させようとしたのである。

このち天正九年（羽衣石落城の前年）には東伯の給地「賦」も完了し、⁽²⁴⁾元春の宛行状に給地や給地高が明記されるようになる。このなかには吉川から本宗家の譜代家臣に

の宛行は、天正七年七月に毛利を離反した南条元統の所領を対象にしていたものと、ほぼ限定できる。⁽²¹⁾しかもこうした宛行状には、「輝元江茂御同心候様可申伺候」といった輝元への吹挙文言や、「対御方様江別而被進置之候」といった執達文言は見られず、愁訴そのものが吉川のもとで処理されていたことを示している。事実、吉川は、南条が離反する直前におこなわれた湯原の愁訴（天正七年五月）に対し、「明所」があれば「吉田中整、可進置」と、本宗家への吹挙を約束していたが、南条離反後の八年四月になると、元春自ら同人に南条領内の東北条にて二百石を「進置」き、吉川家の奉行人がこれを執達していた。また、天正七年七月、南条のもとから脱出して愁訴地の付立を元春のもとに送付し、元春から二千石を「進置」かれた山田重直の場合も、七百五十貫を除いた千二百五十石は、因幡での宛行不履行地の代所として宛行われたもので、付立に河村「郡松尾領内、小鴨弾正左衛門分」と記載されるように、南条家臣の給地を要求したものであった。⁽²²⁾

これらの点に注目するならば、吉川は迫り来る織田軍と対戦するために南条領を宛行うことで、それまで宛行不履行によって生じていた給人の不満を一挙に解決しようとしたものと推察され、その上で新たな「忠儀」を要請し、防衛体制を固めようとしたのである。同様に出雲についても、

宛てた宛行状も存在し、志道元保は「内々、以申談辻」、久米郡東郷にて二百石を宛行われている（関一―四六七―四九）。但し、このような場合でも吉川から給地を宛行われた本宗家譜代家臣の渡辺長宛の輝元書状に、「南条取次領相違付而、立子百五十拾貫之事、可進退之通、元春・元長一通披見得其心候、全可領地事、肝要候」と記されていたことからすると（関一―六八八―三一）、「取次領」の意味は不明だが、⁽²³⁾南条領を欠所とし、八橋郡立子百五十貫を宛行った吉川父子の宛行状を輝元が追認する、という手続きをとっていた。このことは本宗家の譜代家臣に対しては、なお一定の枠がはめられていたことを示している。しかし国衆などは、天正十年に譲与安堵を受けた出雲の天野元嘉（隆重五男）のように、本宗家から宛行われた給地は、元春・隆景・口羽通良・福原貞俊の四人の連署、すなわち毛利家から譲与安堵を受けたが、吉川から宛行われた給地は、本宗家とは別に吉川から譲与安堵状を発給してもらい、吉川と独自に知行関係を形成していた（関二―六八二―七・九）。それは、織田軍の来攻という非常事態を契機として生じたものであり、輝元はかかる事態に対処するため、国衆に対する動員権と南条をはじめとする離反者などの欠所地処分権を吉川に付与し、その権限を強化したのである。ここに吉川の山陰支配は、外庄のなかでより強化され、とりわけ

因伯は、吉川の所領的性格を有することになった。元長が「因伯間ニ以上十三ヶ所之要害を抱」えたと述べていたのも、この頃である（吉別八六）。但しそれは吉川が本宗支配から独立してゆくものではなく、天正九年、鳥取城で自害した吉川経家の忠功を称するために父経安に宛てられた吉川元長覚書に「当^{（吉川）}家之事者付及沙汰、吉田^{（毛利）}河矢之忠功候事」と明記されていたように（石見吉一〇五）、あくまで本宗支配の維持・強化を前提としたものであった。ここに戦国期山陰吉川領の一つの到達点をみることができよう。このうち吉川は、天正十年から開始される羽柴（豊臣）秀吉との領土画定交渉のなかで、東伯耆以東を収公され、同十九年には豊臣政権の指令のもと出雲富田城への在城と、伯耆半国（東伯は南条に安堵）・隠岐・出雲にて伯耆半国相当分を所領として安堵されるが（毛九五七、吉二二）、その原形は既にこの外庄の中で作られていたのである。豊臣政権は、こうした戦国期に大名領国内で編成されていた領域編成を維持・強化しつつ、その上に自らの政権を樹立させてゆく。

註

- (1) 関関録二卷二二頁三五号、同三卷四二七頁七号、同卷四五七頁一〇四号
- (2) 関関録三卷四五七頁一〇七号、同三卷一八三四六号・同四九号

- (3) 関関録二卷二二頁四八号、同卷七九三頁三二二号、同三卷三八頁一三三三。なお上記三二二号文書によると、岡から武器の補給要請を請けた元春は、鉄砲玉薬の支給は了承するが、槍については口羽から支給する旨を返答しており、吉川と口羽は、軍事行動を共にしながらも武器の管理を分担していたことをうかがわれる。

- (4) 関関録二卷五二頁一四号、同三卷六一八頁一〇号
- (5) 加藤益幹「戦国大名毛利氏の奉行人制について」（『毛利氏の研究 戦国大名論集14』八吉川弘文館所収）
- (6) 松浦義則「戦国大名毛利氏の領国支配機構の進展」（『毛利氏の研究 戦国大名論集14』八吉川弘文館所収）
- (7) 河合正治「小早川隆景と織豊時代」（『三原市史』）
- (8) 大野文書『続大野郷土誌』。山陰国衆に宛てた隆景との運署起請文は、このほか、佐波・益田・三刀屋（以上、永禄九年）、佐波（永禄十三年、輝元・元春・隆景連署）宛がある（関二一六三六・一〇・一一、益田文書、三刀屋文書）。
- (9) 山内首藤家文書二四七号、関関録遺漏一八頁六七号、関関録三卷五八三頁二一〇号
- (10) 加藤益幹「戦国大名毛利氏の奉行人制について」（『毛利氏の研究 戦国大名論集 14』八吉川弘文館所収）
- (11) 吉川家文書六一二四号、小早川文書三八六号、吉川家臣覚書一、吉川家中承図。なお新婦は、伯耆に赴く途中、南条の毛利離反を知り、安芸へ引き返したとする説もある（吉川

系譜七）、また国衆の人質が新庄に差し出された事例は、このほかにも湯原春綱宛の杉原景盛書状に「某許滞留候御息女其外之人質之儀、至新庄可指下之由、元春御父子被仰聞候間、任其旨差下候」などあり、その管理は、本宗家奉行人の粟屋元通に宛てた元春書状に、「福屋家衆人質暇事、此節可給之由、以宝珠寺被申候、可然候様披露願申候」とあることからすれば、本宗家が掌握していた（関三一四七三一一七五、同二一七〇〇一七三）。

- (12) 関関録二卷七二頁二八号、七二七頁二六号
- (13) 関関録三卷四四三頁五三三号、同二卷二二一頁二八号、同二卷七七八頁一五号など
- (14) 関関録三卷四九二頁二九号、出雲国造家文書一六六号、
- (15) 『錦洲寺文書の研究』、千家文書九（東京大学史料編纂所影写本）、日御崎神社文書『新編島根県史料編』所収）
- (16) 日御崎神社文書『新編島根県史料編』所収）
- (17) 鰐淵寺文書三〇八二二六・三二二二三四・三三〇二二二号
- (18) 関関録一卷七四〇頁三〇号、同三卷六一九頁一一号、同卷六二二頁一九号
- (19) 関関録三卷四九三頁四三三三、石見吉川家文書一〇三三三。なお動員令が元春・元長の連署を原則としていたことは、本文中に記載した湯原宛の元春書状追而書部分に、「元長事、吉田ニ罷居候之故、不能加判候」という一文から確認できる。
- (20) 日置余左衛門「天正十年高松城講和前後の因伯」（『古文書研究』七・八合併号）
- (21) 関関録四卷二五七頁九号、同三卷三五六頁二二二、石見吉川

家文書一三四号ほか

- (22) 関関録三卷四九二頁二九号、関関録二卷六三三頁一五五号
- (23) 関関録三卷四三七頁三八号、同卷四四二頁五一号、山田文書
- (24) 関関録一卷七四七頁六五五号。『萩藩関関録』の編者は、この文書を永禄九年のものとするが、天正七年の山田氏の給地付立に、ここで宛行われた給地が見えず、内容からも天正九年の文書とみられる。
- (25) 南条元統の名前である「元統」の誤写か。未詳。

おわりに―戦国期の総括・豊臣期への展望―

毛利領国下における山陰吉川領とは、吉川家の旧領と、領国拡大のなかで本宗家から宛行われた石見河本をはじめとする吉川家の所領を存立基盤としながら、かつて大内・尼子領国下にあった石見、同じく尼子領国下にあった出雲以東の毛利領国化を推進するために、歴史的にも、血縁的にも山陰国衆との関わりの深い吉川家の当主たる元春を軸として、元就主導のもとに形成された広域支配の領域であり、その主たる役割は国衆の統制にあった。それは毛利氏の占領政策が国衆の地域支配を承認し、その上に自己の支配を確立させてゆくことを基調としたためであり、吉川家は元就の晩年に形成される毛利新体制のもとで、かかる役割の担い手として山陰支配を推進してゆく。但し、そこに

は本宗家臣の口羽通良も介在し、富田支城領をはじめとする本宗家直属の支城領が要衝に設定され、その城番には本宗家の家臣が派遣されるなど、山陰吉川領とはいっても本宗支配から相対的に独立し、吉川による領主支配が独自におこなわれたわけではない。しかしながら、給人からの愁訴受理にあたって吉川の吹拳が大きな意味をもっていたこと、城普請の奉行や段銭賦課などに関する国衆への両使本宗家と吉川家の双方によって構成されたこと、更には国衆との起請文の締結など、吉川は本宗家の奏者や河本などの支城主といった性格にとどまらず、毛利家当主と血縁の最も近い一族として権力の中枢部にまで関与しながら、譜代層はもとより、他の一族とも異なる役割を担って地域支配を推進していたのであり、広域支配者としての性格を強くもっていた。それは信長との対戦のなかで更に強化されてゆく。この点から毛利領国における山陰吉川領、あるいは吉川と同様の性格を有する瀬戸内小早川領は、後北条領国を中心に明らかにされてきた領（支城）とは性格を異にし、いわばこうした領を、本宗家を核としながら統制する広域支配のありかたとして位置づけられよう。しかも注目すべきことは、その支配の強化は本宗家支配から独立するものではなく、逆に本宗家支配を地域に浸透させていく大きなテコになっていた点にあり、ここに一族支配を軸にして地

域支配を推進していく大きな意味があったのである。この点に毛利領国の特質をみいだせる。

以上、戦国における山陰吉川領の成立と構造の分析をおこなってきたが、最後に豊臣政権下における吉川領の構造を展望することで、この稿をむすびたい。

この点で注目されるのが、同十三年より開始される四国動員の際の山陰国衆に対する動員形態である。この動員にあたって山陰国衆は、五月一日付で吉川元春・元長より、「雲伯石衆無残同道候、其方之儀、自身無緩、可被罷出事肝要候、都鄙一途ニ相談行申付候間、別而人数相催候」と命じられていた（出雲国衆湯原宛／閏三―四五二―八三）。すなわち戦国期に吉川のもとに編成されていた石見・出雲・伯耆の国衆は、豊臣期においても吉川のもとから直接動員令が下っていたのである。外庄のなかで吉川に付与された国衆の動員権は、戦後も継続して付与されていた。そしてこの場合も、動員にあたって吉川父子が「渡海ニ付而人数注文可被差越候、船賦其の外究之由、從吉田被申事候」と明記していたように（閏三―四五三―八四）、吉田＝本宗家の指揮のもとで行動していたのである。この点を最もよく示すものが翌十四年、元長重体にともない、吉川家を相続した元長の弟（元春三男）経言（広家）に対し提出された山陰国衆らの連署起請文である。そこでは、吉川一族の熊谷

をはじめ、益田・周布・都濃・出羽・佐波（以上、石見国衆）、宍戸・天野・湯・古志・多賀・湯原・赤穴（以上、出雲国衆。天野は出雲高津場城主）、杉原・福頼（以上、伯耆国衆）の十五名が、「各々、元春様・元長様御同前ニ属御手、任御下知、上様へ可抽馳走候」と記し、吉川の「御下知」を遵守することが輝元への馳走である、という論理でこれを誓約していた（吉二〇二）。かかる国衆の編成形態は、永禄・元亀以来、吉川によって推進された国衆支配の延長上に位置するものであるが、戦国期の「兄弟一分」という横の編成は、「御下知」という上下の従属関係に変化し、ここに吉川による国衆統制の完成された形をみることができよう。

こうした領国構造をもつ毛利氏に対し、豊臣政権はどう対応したか。たとえば四国帰陣から半年をすぎた十四年四月、秀吉は「九州分目」を行う強制執行の態勢固めを命じる文書を吉川と小早川の双方に発給すると共に、詳細は本宗家に指令して、吉川・小早川両氏に「右馬頭相談、此方城々丈夫可申付」と命じていた（吉五五五）。この指揮系統によると、豊臣政権は戦国段階で形成された毛利領国の領域構造をそのまま掌握し、これを豊臣政権のもとに編成しようとしたことになる。更に豊臣の検使黒田らに、「輝元・元春・隆景諸家中、兵粮又者鉄砲玉薬以下、於無之者不被

置心可被越」と命じるなど（毛九五〇）、本宗家のみならず、吉川・小早川両氏に対しても軍事援助をおこない、それぞれの強化を図ることで、毛利領国総体の強化を図っていたのである。ついで行われた天正十七年の関東軍役、いわゆる小田原征伐についても、豊臣から「其方事、人数五百召連、二月中旬有上洛、尾州星崎城請取、自身可被在番候」という指示は、直接吉川に通達され、「帝都」警固の毛利本宗家、二千五百人を動員して尾張清洲城に在番した小早川隆景とともに、吉川広家は五百人を動員して尾張星崎城に在番し、毛利家は、この三家で帝都守備と徳川領の警固をおこなった（吉一一三、閏一二―二八七―七）。

こうした豊臣政権の掌握形態は、天正十九年三月、毛利氏に与えた百十二万石の知行安堵の朱印状に明確にあらわれ、そこでは本宗家の所領とは別に、吉川広家と小早川隆景の領地設定までもなされていた（毛九五七）。このうち吉川は、出雲富田在城を指示され、隠岐、ならびに伯耆三郡と、伯耆の残り三郡相当分を出雲にて宛行われるが、注意すべき点は、それが豊臣政権によって独自に設定されたものではなく、戦国期に形成された毛利領国の地域支配を前提として設定されていた点である。これよりのち吉川に対する豊臣政権の命令は、「羽柴新庄待従」から「羽柴富田待従」へと変化し（吉一二五）、関白法は、「伯耆三郡之内

〔富田〕羽柴戸田待從・「出雲国中羽柴戸田待從」・「羽柴富田待從分領」を宛所として発給される（吉一二四〇六）。それはまさしく戦国期吉川領の強化を狙って行われたものといえよう。もちろんこの時点においても吉川が独立して掌握されたわけではなく、天正二十年の六十六ヶ国人弘令の詳細は、本宗家の奉行人である佐世元嘉と安国寺恵瓊より吉川奉行人の栗屋右衛門尉・桂左馬助に通達され、調査の結果は本宗家に提出されて、本宗家から豊臣に報告される、という手続きを踏んでいた（吉七九二）。吉川は豊臣に掌握された上で、本宗家のもとに編成されていたわけである。

以上のように、豊臣政権は、戦国期において形成されていた本宗家―両川による地域支配の体制を基本としつつ、それぞれの権力強化を図ることによって、総体としての毛利領国の強化をめざし、その上に自らの権力を樹立させた。これに対し毛利氏は、この豊臣政権を背景として、本宗家―吉川・小早川という大枠は維持させながら、本宗家の広島移城、全領国におよぶ給人の所領替えを強行し、戦国期以来の支配体制からの転換を図ってゆく。そこで再編された豊臣期の山陰吉川領は、のちの岩国藩の祖形となるものであった。

〔付記〕本稿校正中、木村信幸氏「戦国大名毛利氏の知行宛行とその実態」〔『史学研究』一七四号〕を得た。愁訴や宛行など本稿と関わる部分もあるので参照されたい。